

E
エッセイ
Essay.

ベネズエラ日系人協会竹内浩之会長と大塚さん

ベネズエラ友好親善
訪問の旅プエンテリコ・ベネズエラ
会長 大塚 昌代

ベネズエラって、どこにあるの?どんな国?と尋ねられる未知の国“ベネズエラ・ボリバル共和国”(南米のブラジル北隣、カリブ海に面し、領土は日本の約2.4倍、人口2700万人、世界有数の原油産出国)へ旅してきました。

2005年愛知万博「一市町村一国フレンドシップ事業」において豊橋市のパートナー国としてベネズエラ・ボリバル共和国との交流が始まりました。そして万博終了後もこの交流を継続していこうと、2006年11月市民団体として“プエンテリコ・ベネズエラ(豊かな架け橋)”の会を設立し、ベネズエラ音楽のコンサート、料理教室など様々な行事を行い、次第に会員のベネズエラへの関心が高まってきました。

会の発足当初から、是非にと訪問を切望していたところ、2008年10月「ベネズエラ日本人移住80周年」の記念を迎える情報とともに、石川成幸駐日ベネズエラ・ボリバル共和国特命全権大使(日系人)、また、竹内浩之ベネズエラ日系人協会会長からの参加要請を受け、今回の友好親善訪問が実現しました。親善訪問のため豊橋市長のメッセージをいただいたり、両国と連絡を取り合ったりと準備が大変でしたが、10月9日一行8名(男女各4名)はセントレアより出発しました。ドイツ・フランクフルト経由(12時間)でベネズエラの首都カラカス(10時間)までの長い旅路の後、カラカスの空港に降り立った時の感慨はひとしおでした。

カラカス滞在中は 出迎えから見送りまで日系人協会の方々の安全に配慮いただいた全面的なご協力をいただき、充実した楽しい毎日でした。

11日、下荒地修二在ベネズエラ日本国特命全権大使のお計らいにより、大使公邸の広大な庭園で歓迎会を開催していただき、ベネズエラ派遣中のJICA 青年海外協力隊員18名とともに楽しく有意義なひと時を過ごしました。



12日、記念式典は約350人(日系2世、3世)の出席者で、華やかな中にも厳粛に執り行われました。各氏の祝辞で、日系人最高齢者の芹沢芳太郎様(90歳、1937年移住当時17歳)は「私は今日まで、日の丸を背にして恥じることの無い生活をしてきました」との凛としたお言葉に感銘し、今の日本では既に死語となり、その心も失っているのではと思いました。

私も祝辞を述べる機会をいただきました。出発前、「式典には是非和服で」と周囲にすすめられ躊躇しましたが、当日の和服姿には大きな拍手で歓迎され、席に戻ると老婦人が近づき懐かしそうに私の着物にさわり、目に涙を浮かべていたその姿は、今も心に残っています。式典終了後は日本の懐かしい歌声で会場は盛り上がり、サルサダンスで終わることを知らない饗宴の一夜でした。

公式行事も終了し、一行はもう一つの旅に出発。それは、世界自然遺産ギアナ高地の世界最長「エンジェルの滝」を見ることでした。



カラカス空港からギアナ高地の入り口プエルトオルダスまで行き一泊。翌朝12人乗りのセスナ機でギアナ高地へ。機上から見下ろすギアナ高地の秘境。ジャングルに囲まれた湖や河がどこまでも続く景観。断崖絶壁のテーブルマウンテン。セスナ機はカナイマ湖畔に着陸。ボートでカナイマ湖を遊覧。これもスリル満点の素晴らしい体験となりました。再び雲間を見てエンジェルの滝の近くまで飛行遊覧。運よくテーブルマウンテンから流れ落ちる落差979mの滝を目にしたとき、一同歓声をあげ、カメラをパチパチ…。今、その写真を手にして、本当にこの景色を眺めてきたのだと、夢のような気持ちでいます。

未知の国ベネズエラの旅は、短い滞在でしたが、元気に逞しく生きている日系人との多くの出会いを通じて、今後もベネズエラとの交流を深め、プエンテリコ・ベネズエラを見守って行きたいと思いました。